デアツタ。

治療ノ術式ハ齒髓根絶ニ於テハ、亞砒酸デ齒髓ヲ腐蝕スルカ或ハ局所麻醉ヲ抜髓シタ後、過酸化水素ヲ洗滌シ、根管が狭イ時ニハ王水ヲ擴大シタ後 Na_2O_2 デ中和シ、器械的擴大ニハ「カーブローチ」ヲ用ヒタ。根管充填ヲ施ス迄ノ期間ハ、「クロールフェノール」或ハ「クロールフェノールカムフル」ヲ貼藥シ、根管充填ハ「トリオパスタ」ト「ガッタポイント」トヲ用ヒタ。腐敗根管ノ場合ニハ、「トリクレゾールフォルマリン」ヲ貼藥シ、齒根端切除術ノ際ニハ「ヨードフォルムセメント」ト象牙ノ「ポイント」ヲ用ヒタ。齒髓切斷ニ於テハ、髓室ノ齒髓ヲ亞砒酸デ腐蝕シタ後、髓室ヲ消毒シタ「パー」デ開鑿シテ、齒冠部齒髓ヲ根管口ノ處カラ除去シ、氣銃ニテ髓室ヲ充分ニ乾燥シタ後、「トリオパスタ」デ齒髓ノ傷面ヲ充分ニ蔽ヒ、亞鉛華「オイゲノール」デ氣密ニ封塞スル。(川上)

補 綴 科

機械的要求ニ對スル「ジャケットクラウン」ノ抵抗性ニ就テ

Über die Widerstandsfähigkeit der Jacketkronen gegen mechanische Beanspruchungen (Von Dr. Julius Mathe, und Dr. O.

Preisecker, Z. für St. Ht. 3. 1931. S. 248

著者ハ Jacketkronen ノ機械的抵抗カヲ試験シ臨牀の方面ニ興味アル結果ヲ示シテ居ル、即チ P. K. (以下便宜上 Jacketkronen ヲ省略シ P. K. ナル記號ヲ用フ) ト云フモノハ前齒ニ於テハ單ナル裝飾的ナモノニ止マラズ器械的ニモ亦充分ナル抵抗カヲ持ツテ居ルモノナル。又場合ニヨツテハ臼齒部ニ用ヒテモヨイト云フテ居ル。

著者ハ試験材料トシテ Justi Porcelain ヲ用ヒ模型上テ種々ナル厚サノ P. K. ヲ作り之ヲ「アマルガム」支臺上ニ「セメント」ヲ以テ接着シタ後「ブリキ」ノ圓筒中ニ石膏ヲ以テ模型ノ長軸ニ從ツテ埋メ齒冠部ノミヲ露出セシメルカ或ハ通常ノ咬合狀態ヲ模倣シテ咬合器ニ石膏ヲ以テ埋メルノナル、此ノ咬合器ヲ應用スル場合ハ其ノ對合齒トシテ、新鮮ナ拔去齒牙ガ用ヒラレタ。以上ノモノヲ壓迫試験器ノ間ニ介在シテ其ノ試験物ノ抵抗カヲ試験シタノナル、其ノ結果トシテ臨牀の方面ニ價值アル結果ヲ得ル事ガ出來タ。

P. K. ガ咬合壓ニ對シテ充分ニ抵抗シ得ルカ否ヤト云フ事ニ關シテハ先ヅ門齒齒冠ト臼齒齒冠トガ非常ナ相違ノアル事ヲ知ラザバナラス、何ントナラバ新鮮ナ拔去前齒ハ 60-70 Kgノ重量ニ於テ既ニ龜裂ヲ來タシタガ之ニ反シ下顎ノ臼齒ハ 200-250 Kgノ重量ニ何等ノ損傷ヲモ受ケナカツタ。以上ノ様ナ理由テ今若シ前齒及臼齒ニ各々 P. K. ヲ裝著シタトスルナラバ、其等 P. K. ノ抵抗カガ兩者トモ全く同ジデアルトシタ時ニ臼齒ニ裝著シタ P. K. ハ門齒ニ裝著シタ P. K. ヨリモ遙カニ大ナル破壊ノ危險ニサラサレテ居ル理ケデアル。即チ新鮮ナ拔去前齒ハ P. K. ノ裝著サレタ對合齒ヨリ以上ノ重量ニハ耐ヘ得ナイガ、之ニ反シ臼齒ノ抵抗カハ臼齒ノ P. K. ノ抵抗カノ 2倍以上モアレト云フ事デ明カデアル。以上ノ理由テ臨牀上臼齒ノ P. K. 破壊ニハ屢々

遭遇スル前歯ノ P.K. ノ破壊ハ非常ニ稀ナル事ガ解ル。又試験ノ結果 P.K. ノ切端ニ於テ軸ノ方向ニ重量ヲ加ヘタ場合ハ平均 82 Kg ノ壓ニ耐ヘ得ルガ齒冠舌面ノ中央部ニ於テ軸ノ方向ニ直角ニ壓ガ加ハル時ハ平均 68 Kg ノ壓ニ耐ヘ得ルニ過ギス、又齒冠部舌面ノ齒頸縁ニ近ケレバ近イ程壓ニ對シテハ陶材ノ破壊ハ容易ニ起ルト云ハレテ居ル、故ニ深イ被蓋咬合ハ P. K. ニ對シテハ適應シタモノデアルトハ云ヘナイ。而シカ、ル場合ニ P. K. ラ作ラウトスルナラバ齒冠ノ舌側齒頸部ノ方ヲ齒齦中ニ出來ルダケ深ク削ツテ被蓋ノ接觸カラ遠ケル様ニスル。又其ノ部ノ陶材ノ厚サヲ増加サセル爲ニ舌側ノ結節ガ出來ル様ノ形成ヲスル必要ガアル、試験ノ結果 P. K. ノ壁ハ平均周圍ニ於テ 1-2 mm. 切端ニ於テハ 3mm. ナル様ニスルノガ適當ナル、著者ハ又其ノ試験ノ一部トシテ齒頸部ノ段階(Schulter)ノ無イ P. K. ニ對シテモ行ヘタ其ノ結果トシテ壓ガ P. K. ノ上方カラ軸ノ方向ニ加ヘラレタ場合ハ段階ノ有無ニ關セズ全ク同シ重量ニ耐ヘ得ル事ガ解ツタ。而シ此モノハ被蓋ノ深イ場合ハ前述ノ如ク齒頸部ノ周縁ガ薄ク作ラレテ居ル爲ニ適應シナイ。P. K. ラ強固ナモノトスル爲ニハ以上ノ理由ヲ斟酌スル外陶材ノ壓縮ト適當ナル燒成溫度ニヨツテ其ノ強度ヲ本質的ニ高メラレルモノナル。又其ノ「セメント」裝著ニ際シ氣泡ヲ「セメント」層中ニ殘ス等ハ絶對的ニ避ケテバナラス、裝著ニ際シ對合齒トノ關係位置ヲ充分ニ形成セテバナラナイ。即チ P. K. ノ破壊ノ危險ガ點的ノ壓迫ヲ受ケタ際ノ面的ニ壓迫ニ於ケルヨリ遙カニ大ナル事ヲ實驗シ得タカラ臨牀上ニ於テモ亦此ノ試験ノ結果ヲ重要視スル必要ガアル。即チ齒冠裝著ニ際シテハ咬合紙ヲ咬マセテ、咬合齒トノ接スル所ヲ面的ニ至ルマデ形成スルノデアアル。又對合齒トノ接觸面ガ餘リニ滑澤ナ「ガラス」化サレタ様ナ表面デ無イ方ガ咬合齒ノ磨耗ヲ起シ之ガ他ノ部ノ齒牙ノ生理的磨耗ト類似的ニ起ル爲ニ非常ニ必要ナ條件ナル。

(檜山)

矯 正 科

不正咬合ノ原因ト認メラル、巨大ナル舌 Übermäßige

Größe der Zunge als Ursache von Okklusionsanomalien.

K. Wachsmann und F. Neumann. Z. für St. S. 32. 1931.

巨舌症(Makroglossie)ヲ大別シテ脈管腫性巨舌症(Angiomatösen Makroglossie)ト筋肉性巨舌症(Muskulärer Makroglossie)トニ分ツコトガ出來ル。後者ハ主トシテ舌筋ノ肥大及ビ増殖ニ依リテ起ルモノナル。著者ハ此ノ筋肉性巨舌症ガ如何ナル不正咬合ヲ誘起スルカニ就テ記載シテアル。著者ノ實驗例ハ殆ド全テニ於テ舌ハ一見シテ頗ル巨大デアリ且ツ齒牙ハ全ク定型のナ不正狀態ヲ呈シテワツタト報告シテアル。然シナガラ舌ノ大サヲ生體ニ於テ客觀的ニ決定スルコトハ不可能事ニ屬スルナル。ナゼナレバ第一ニ舌ノ形態ハ筋肉ノ收縮ニ從ツテ頗ル變化シ易ク第二ニハ正常ナル大サト云フモノガ未ダニワカツテアラナイカラナル、從ツテ舌ノ大サヲ決定スルタメニハ主觀的ニ此レヲ行フ必要ガアル。

著者ハ巨舌症ニ依リテ起サル、不正咬合ノ狀態ヲ大別シテ3種トシテアル。